

境界曖昧空間

谷中初音小道における陰翳を用いた建築

指導教員 吉松秀樹教授

6AEB1206 滑川 洋平

1. 初音小道の体験

谷中初音小道では道幅も狭く屋根が掛かっているため薄暗く、看板や室外機により「かげ」が現れ魅力的と感じた。「かげ」のできない道では建築と道の境界が明確になる (fig.1)。一方、「かげ」のできる初音小道では建築と道の境界が曖昧になる (fig.2)。実際には壁が存在するのに、認識上壁の存在が曖昧になる事が魅力的だと感じた。



「かげ」のできない道では建築と道の境界が明確になる。見渡せて面白くない。

fig.1

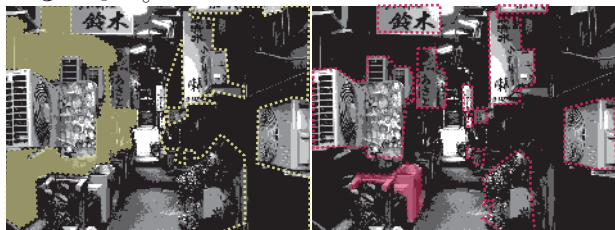


フィジカル フィジカルな空間
認識 体験とは別に陰による認識上の空間が存在する

fig.2

2. 境界を曖昧にする「かげ」

モノクロ 10 階調にし初音小道の色を 10 段階に分ける事によって光と「かげ」の関係を調べる (fig.3)。それによって光のあたらない所のできる陰と、光が弱まってできる翳で境界を曖昧にしている (fig.4)。



「陰」看板や室外機により光が「翳」光が弱まっているのが届かず黒く潰れている。板に映るグラデーションにより分かる。

fig.3

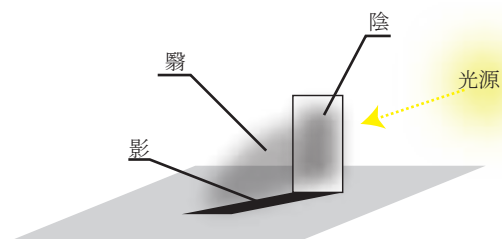


fig.4

3. 陰翳をつくる壁

初音小道における陰、翳を用いてを陰翳モデルを製作する。看板や室外機のような突起物よって空間を構成する事によって陰翳をつくり境界を曖昧にする (fig.5)。

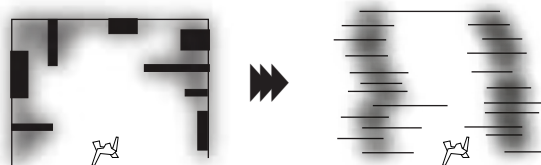


fig.5

4. 境界曖昧住宅

境界を曖昧にする陰翳モデルに部屋同士の関係性を持たせる。陰翳をつくることで部屋同士の明確な空間の境界が曖昧になる。人それぞれによる空間認識により空間の境界の位置が前後に揺れ動き部屋としての単位と活動の単位にズレを伴いながらも連続する建築を提案する (fig.7)(fig.8)。

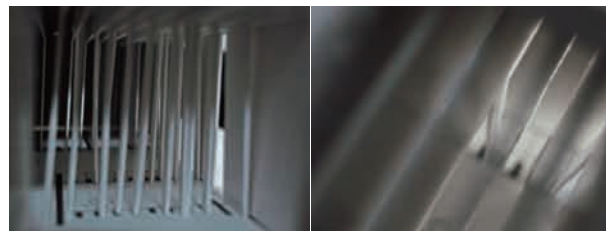


fig.7

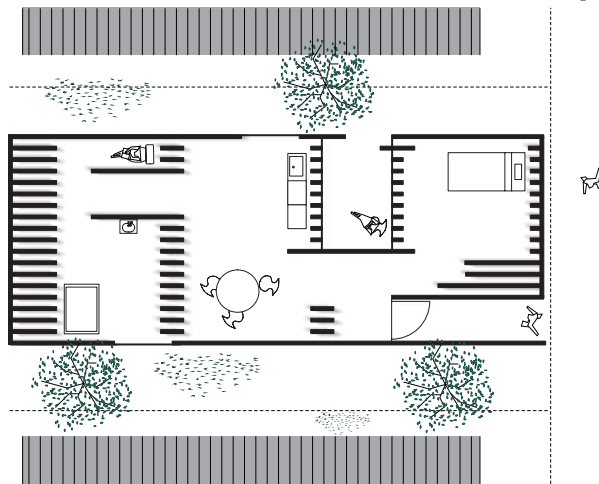


fig.8